

## ブラディ・ダーウィン

ピーター・グロース 著、伊藤 真 訳



多くの日本人にとって太平洋戦争は米国との戦いを意味するが、オーストラリア人の記憶では対日戦争そのものである。認識は大きく違う。

1942年2月、日本軍がオーストラリア北端部のダーウィンに行った空襲は「豪史上最悪の惨事」とされる。約10週間前に米真珠湾を奇襲した部隊による損害は、真珠湾以上ともいわれる。

### 豪州が語り継ぐ対日戦争

本書は、日本でよく知られていない空襲の詳細を臨場感たっぷりに描く。防衛に身を挺し、負傷者を救援した兵士や市民の姿が印象的だ。他方、行政や軍幹部の無策に対する非難は容赦ない。

隊を率いた淵田美津雄中佐の著書などを基に、日本側のストーリーを織り込んでいるのも興味深い。戦争といえば痛ましい物語を連想しがちな日本人には、緒戦における日本軍の勝利や、日本軍パイロットの勇気と投量に対する賛辞に、違和感を覚えるかもしれない。

オーストラリアでは、戦争体験が国民のアイデンティティー形成に大きな役割を果たしてきた。勇敢で自己犠牲を厭わない兵士の英雄的な活躍に、政府やリーダーへの辛辣な批判を組み合わせた本書は、かの国の戦争文学の伝統を踏まえ、読者の期待に応えたものといえる。

一方、歴史学者はこの種の作品群を「大衆向けの歴史(ポピュラー・ヒストリー)」と呼び、しばしば史実の誤認を指摘してきた。ダーウィン空襲の意義を過大視しているとの批判

もあり、「国民が共有すべき戦争」と「史実としての戦争」の断層が存在する。日本のオーストラリア侵略計画の存在を否定する歴史学の定説に、本書が背を向けるのはなぜか。アジア系住民が多かったダーウィンで、資産を失った中国系、強制収容された日系人、移住を強いられた先住民はそれぞれ違う体験をしたはずだが、その多様性に触れない筆者の意図は何か。

戦争をいかに継承すべきかを考える上でも、示唆に富む一冊だ。

▽評者＝鎌田真言・名古屋商科大教授  
(大隅書店・2940円)

# 社説余滴

かみ しげる  
各務 滋



## 「ダーウィン」の教訓

70年前、日本軍はオーストラリア北部の街、ダーウィンを空襲した。

6月に出版されたルポ「ブレイ・ダーウィン」(大隅書店)を読むまで、恥ずかしながら私は知らなかった。

豪州史上最大の約300人の犠牲者を出したと、著者のジャーナリスト、ピーター・グロース氏は記している。

高校の歴史教科書を何冊かめくってみた。戦線の説明図に小さく街の名を載せたものがある程度だ。真珠湾やミッドウェーには大半の教科書が本文で行数を割いている。

哲学者で京都大准教授の出口康夫さん(49)は2年前にこの街を訪れ、前年に出版されたばかりの原書を読んだ。そして、帰国するなり親しい編集者に出版を勧めた。

出口さんはこう話す。  
「日本ではオーストラリア

と戦ったことさえ忘れられがち。英米や中国との戦争としかとらえていなくて、南半球まで見えていない。そういう偏りを教えてくれると思ったのです」

今の日本が学ぶべき教訓も含まれている。

空襲後、オーストラリア政府は高名な判事を現地に送り込んだ。軍や行政が被害を最小限に防ぐ備えをとっていたかを「独自に、かつ中立的な立場で」調べるためだ。

判事は2日後には戦闘機やレーダーの増強を提言。1カ月後には83人から詳細に聞き取った報告書を提出した。そこには、軍幹部のリーダーシップのなさが混乱を招いたと指摘されている。

「軍という専門家集団の判断を、第三者の目で検証させることのできる国だった。そこに、軍の独走を止める仕組

みがなかった日本との違いがある」と出口さん。

これは昔話だろうか。

福島原発事故で、国会事故調はこう指摘した。「推進官庁、事業者からの規制当局の独立性は形骸化し、監視・監督機能を果たせなかった」

専門家が判断を誤ったとき、止める仕組みが弱かった。そこは戦時中と通じるものがある。

では、どうするか。

専門家にも申せるゼネラリスト(幅広い分野に通じた人)を育てることではないかと出口さんは考える。

専門家が唱える定説をうのみにせずに質問し、自分の考えを言う。そういう批判的思考ができる人と社会を育てるのは、大学とメディアの仕事だ。出口さんはそう結んだ。重い宿題をもらった。

(事件・教育社説担当)